

これは4月25日(月)高崎翁をしのび、飛驒の莊川桜見学において、莊川桜伝道者林子平さんのお話をまとめたものです。素晴らしいお話で感動しました。我々も涙でした。

■水没記念碑の前でのお話

高崎さんは「ふるさとは 湖底(みなそこ)となりうつし来し この老桜咲けとこしえに」という歌を謳われ、藤井総裁の書で石碑となったものです。この歌碑の除幕式にこられたとき、高崎先生はハラハラと涙を流されました。うちの母も、村のみんなも泣きました。高崎さんの目にも熱いものが滲んでおりました。(さくらです！涙ながらに語らえました) この下が私が勤めていた中野小中学校、ここを歩いて、湖を見ると涙が出てくる、これは悲しい涙ではない。「父ちゃん泣いてるね、何が悲しいの？」悲しい気持ちの涙ではない。この湖面を見ていると自然に涙が湧いてくる。2月になると渇水期で湖に沈んだ村の跡が見える。ハラハラと涙が出る。これが地元の間人です。



■ダムサイドパークで“莊川桜と高崎達之助”のお話

このダム建設の話が出たのは、昭和 27 年の春でして、その時日本は電力事情が逼迫しており、なんとか電気を起こしたい、しかし日本は天然資源が少なく、石炭・石油がないので水力発電をやりたいとの話であった。高崎先生ははじめ昭和 27 年頃は現地に来られなかった。それは、「皆さんと会わなかったのは、私と会ってしまえば、それが最後になる。私の仕事は国から与えられた使命であって、大きなダムを造るのは私の責任だ。ところがそのときは、皆さんを移さなければならず、故郷は無くなってしまう。私は両者を考えなければならない。私は人情に深いから、皆さんに反対されますと、おそらくこのダムは止めましょう、ということになる。」、そのようなことから会われなかったと言われている。

そして、この計画の莊川村の人口は 3000 人ぐらいで、その半分ぐらいは引っ越せという話であった。戸数も 300 戸ぐらいあった。こんな大きなダムができると村がなくなってしまうので、陳情書を役場・県庁・電源開発・通産省などに出し、昭和28年に陳情団が大挙して東京に行き交渉を行った。この移転ははじめは金で買うという話であった。死守会が怒ったのはダム協力金として 20 万円ずつ配られたことであった。「魔の 20 万円」で、差別が出てくる。このようなとき高崎先生は、「協力費大変なものを部下が配ったようである、これはお金でみなさんを釣るように採られる。部下がこのようなことをしても、責任はすべて私にある。申し訳なかった」ので、これはこれからやめます。そして名前を変えます。協力費でなく、移転準備金です。準備金であるので、移転が決まり補償費が入れば差し引きますよ」と言われ、これは大変なことで皆はびっくりした。これは第二の故郷の調査のために使う費用である。実に筋の通った話であって、それで我々は納得したのである。高崎さんのような方はめったにいらっしやらない、とその時思った。今の総裁は偉い人で、考えてくれると……。

それまでは高崎さんのことを、ダムでもって村を水没させる“水の魔物”“水魔の領袖”であり、絶対阻止するために村の入口鎮守の森には、「水魔の退散祈願」の大きな看板を貼っていたが、申し訳ないことをした、とその看板をはずした。その頃から高崎さんは立派な方で、温情あると反対派にもだんだんわかってきた。しかし長い年月がかかった。

普通のダムであれば2年ぐらいでできる。ところがこの御母衣ダムは7年かかっている。なぜかという地盤が悪い、山と山の間には大きな断層が通っている。断層は柔らかい、そこにダムを造るとズレる。高崎はアメリカに飛び、ロックフィルダムという新工法の導入によって着工の目処がついた。日本で最も安全にできるダムである。



闘争も終わり、解散式に出席し、光輪寺の住職、若山芳枝、佐々木良作(後に民社党)も同行し村を歩いた。その時高崎さんは住職に向かい、「あなたのお寺はお金を渡せばいつでもできる。しかしこの桜は湖ができれば沈んでしまう。私は目を閉じるとこの桜が湖の底でさびしく揺らいている姿が判る。なんとかしてこの古き桜を助けてやりたい。「古きものは古きがゆえに尊い」、それで湖の上にあがったのである。そのあと桜博士の笹部新太郎氏がおいでになった時に照蓮寺の桜を見つけて 2 本とも上にあげましょうということになった。笹部さんが中心で、実際の仕事は豊橋の庭師丹羽政光が 50 人の優秀な弟子を集めて行った。



桜移転のようなことは、村の者は考えていなかった。日常のこれからの生活ばかりを考えていた。後になって考えると、この桜は私たちの生活といっしょだったのです。昔を思い出し、子供の頃はお兄さんやお姉さんに背負われて、ガキの頃はこの境内の桜の下で遊び、一番のガキ大将は桜の木の上まであがれた。また、桜がある境内は夕方になると薄暗い、デートにとっては絶好の場所であった。私も今の奥さんで行ったが、先客が有り一時間ほど待ったこともあった。年を取ると杖をつきながらお寺に来たとか、赤ちゃんからお年寄りまで、桜は生活の中にあつた思い出であった。その桜が高崎先生のおかげでこの湖畔にあがった。

この莊川桜は、高崎さんから、村が沈むことへの皆さんへのプレゼントである、とおっしゃった。将来湖を見に来た時になにか目印が必要である。それは日本の桜である。高崎先生の桜といっても良いものである。

愛情をお持ちになって1964年にお亡くなりになった。我々には感謝の言葉しかない。